

CAとの一夜

自分の席の番号を見て確認する。間違いないことがわかるとリコは上の荷物棚に手荷物を放り込み、小さなバッグだけを持って座席に座った。

今回は女装をして初めての飛行機だった。行先は北海道だ。今までいろんな乗り物に乗ったが、飛行機は初めてだ。とてもワクワクするが、女装をしていると思うと緊張する。

彼は身長一八〇センチと背が高く、女装をするには向いてない体格なのだが、体がスリムなために、女の子になるとパス度が高く、今まで男子だと気づかれたことは一度もない。公共の女子トイレを使ったときでも、男

子だとばれたことはないくらいレベルの高い女装男子だった。

北海道という土地も初めてで、以前から一度は行ってみたいと思っていた。それが今回やっと念願が叶い、思い切って女の子で行ってみることにしたのだ。これは本人にとっても、非情に思い切ったことだった。

席は運よく窓際が取れた。リコは自分の場所に腰を下ろすと、早速窓の外を眺める。まだ離陸していないので、景色は灰色の地面しか見えないのだが、それでも初めての飛行機ということ、そんな景色でもテンションが上がっていた。

隣の席にもう一人の客が来たようだった。三十代ぐらいの女性だった。

リコは視線を外に向け、なるべく目を合わせないようにした。相手が女性ということ、少し緊張する。

女というのは勘が鋭いので、リコが女装男子だと見抜いてしまう可能性

があるのだ。その女性客もリコと同じように番号を確かめてから、荷物を上の棚に入れた。

そして彼を一瞥すると、途端に眉根を寄せたのだ。彼は嫌な予感がした。案の定、女は声をかけてきた。

「あなた、もしかして男？」

露骨にそう言ったのだ。リコは瞬時に好意的ではないと確信した。

「……あ、はい」

彼は蚊の鳴くような小さな声で答えた。どんな顔をしていいのかわからない。動揺を隠せなかった。

「いやだあ」

やはり想像した通りの反応だ。明らかな嫌悪感を示している。リコはたちまち緊張して、女装で飛行機に乗ってしまったことを激しく後悔した。

自分の無謀さを呪った。やめておけばよかった……。